

◆旧きをたずねて新しきを知る◆

写真と記事でたどる武道の近代史

第1回

大阪大学助教授 杉江 正敏

▼連載をはじめるにあたって

◎近代武道史研究の意義

現在、「武道」という語の内包する意味は多面的（スポーツ・体育・修養・武術など）であり、種目も多岐にわたっています。武道という語は、近世においては武士道を意味することが多く、武的技芸を示す言葉は武芸・武技・武術などと称されました。この武道という語が剣道・柔道・弓道などを総称する意に用いられるのは近代に入ってから、それも大正の中頃のことです。

現代の武道の多くは、他の日本なるものといわれる文化と同様、その道統の源は中世にあり、近世に流派としての姿を整え、近代に入り伝統と近代化という試練を経て、その内容が取捨され今日に至った

ものです。

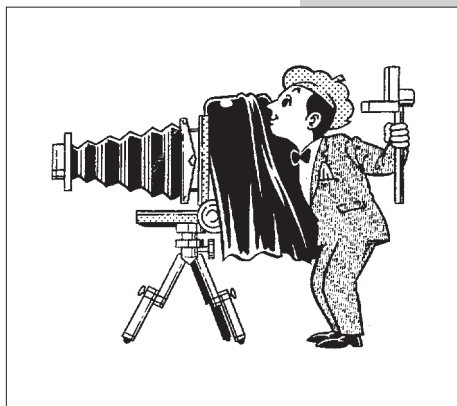
現代の武道は、これらの歴史的過程の中で蓄積された多様な価値観が複雑に絡み合っている、そのまますぐに解きほぐすことは困難です。それにはまず、この近代という時期に何を受け継ぎ、何を捨て、どんな考え方を新しく取り入れたのかという分析が重要となりましょう。

また、社会の転換期に関わって一つの文化現象を理解するためには、その文化の内容が質的にどのように変化したのかという研究（武道理念の形成や社会的評価）と同時に、量的にどれだけの人々にそれが行きわたったのかという研究（普及・伝播の問題）が必要とされます。

◎私の研究の整理

先に述べたような意図で始められた私の雑多な研究を整理しますと、次の七項目に分けることができます。

- 一、明治期における武道理念の近代への適応をめぐる諸問題
- 二、明治期における武道の普及伝播に関する研究
- 三、明治期における武道の社会的評価についての研究
- 四、大正期における武道の普及と流派性解消の契機について
- 五、大正末期から昭和初期にかけての社会や課外活動としての武道について
- 六、大正十年頃から昭和十五年頃までの





『風俗画報』(写真1)

学校体育としての武道について
七、戦時体制下の武道について
これらの研究のなかで、三・五・六・七の研究は雑誌を資料として用いたものでした。

明治期における武道の社会的評価

明治二十二年二月に東京・東陽堂から発行され、大正五年四月の第四七九号で刊行を終えるまで、明治・大正期の時事・風俗を綴った貴重な資料として注目されていた『風俗画報』(写真1)を中心に、関係記事や図版を整理しながら、二十年代以降における武道の社会的評価について次の五項目をあげて検討しました。

- 1、 武術の興行と講習会への移行
- 2、 明治二十年以降にみられるナショナリズムの風潮と武道
- 3、 学校教育と武道
- 4、 日露戦争と武道

5、 歓迎奉祝行事および博覧会と武道
明治二十年代は、前時代の鹿鳴館に象徴される表面的な欧化主義が反省され、国家主義を基調として欧米の文物を選択的に移入しようとする、いわゆる和魂洋才が主張され、日清戦争に向かつて富強主義教育が推進された時代でありました。

また、嘉納治五郎が大日本教育会の求めに応じて、「柔道一班並二其教育上ノ価値」を論じたのが明治二十二年五月のことでした。二十六年頃からは、武術を学校教育の正科として採用すべきであるとする、熱心な正科編入国会請願運動が始まります。

明治期を通じて正科編入を拒み続けた文部省も、明治四十四年七月、中学校令を一部改正し、正科として「撃剣・柔術」を加えることを認めることになりました。この正科編入運動の背景にあった社会の風潮をこの雑誌から眺めてみたいと思います。

武道とスポーツ

大正十二年三月十五日に創刊された『アサヒスポーツ』(写真2)を用い、入手できた14巻29号(昭和十一年十二月)までの武道関連写真・記事目録の作成をおこないながら、

- 1、 外来スポーツと武道
- 2、 中学および高専武道大会



『アサヒスポーツ』(写真2)

- 3、 明治神宮大会と武徳会の不参加表明
- 4、 スポーツマンシップと武士道精神
- 5、 外来スポーツの隆盛と武道
- 6、 柔道とレスリング
- 7、 「非常時日本」と武道

などの項目にわけ、特に武道とスポーツの関わりについて研究を進めました。

『アサヒスポーツ』は、まず最初にその号における時事的トップニュースを掲げ、欧米のスポーツ事情や一流選手のフォームの紹介に始まり、国内に導入された新しいスポーツの解説、各種スポーツの指導法や大会記録などをB4判、31頁に収め月に二回刊行されました。

学校教育と武道

『運動界』(大正九年四月運動界社)『アスレチックス』(同十一年四月大日本体育協会)などと相前後して、大正十年三月に『体育学会』(東京高師体育科の教官を中心



『體育と競技』(写真3)

として発足) によって発行された『體育と競技』(写真3) に着目して、『アサヒスポーツ』と同様の手法を用い、

- 1、大正十年以降にみられる武道教育論の動向について
- 2、昭和六年の武道必修化への経過について
- 3、体育の日本化の進展と第二次改正要目
- 4、武道教授要目の制定とその後の動向など、武道教育論の展開とその経過を追いました。

戦時体制下の武道

『體育と競技』誌を主として改題再編された『学校體鍊』(昭和十六年一月〜十七年一月) および、さらに改題された『学徒体育』(十七年二月〜二十年三月)と『国防・武道・体育綜合指導』を標榜する国防

武道協会によって、十六年四月の創刊から二十年六月の終刊まで刊行された『新武道』誌を用いて、戦時体制下の武道について以下の項目に検討を加えました。(写真4)

- 1、体育論と武道論の接近
- 2、武道団体の統合と問題点
- 3、国民学校武道
- 4、武道の戦技化と不要論

ここで、大正期から戦時体制にいたる社会と武道のかかわりを手短に概観してみますと、大正三年七月に始まった第一次世界大戦は、同七年十一月に終結します。この四年半にわたる大戦は、世界の人々に戦争の悲惨さを知らしめ、軍縮と国際協調が戦後の課題となりました。それと同時に今後の戦争が国力を挙げての総力戦となることを示唆する戦となり、民族自決主義の中で



『新武道』(写真4)

各国が国力の増強に努めることになりました。

この頃、英米のデモクラシー教育論が翻訳され、スポーツ的ゲームによる社会性の訓練の必要性が強調され始めます。それと共に、民族主義を底流とする世界状況の中で、武道のもつ伝統的文化性と精神性が文部省に認知され始め、十五年の体操教授要目の改正で「撃剣・柔術」が「剣道・柔道」に名称変更されることになりました。

しかし、その当時は和洋長短補正のバランス感覚が強く、武道は教練・体操・競技と並置される位置にありました。このバランスが崩れ始めるのは、昭和六年九月の満州事変以後のことです。武道は「国粹の精華」ともいべき教材であるとされ、軍国主義教育の一端を担うことになりました。

以上の諸誌から目録にピックアップした写真や図版は数百点にのびります。これらの写真や図版を中心に、主要な記事も織りまぜて、日本の社会の近代化の流れのなかで、武道は伝統と近代化という試練をどのように経験し、現在にまで伝えられてきたのかという問題について考えてみたいと思っております。

なお、雑誌の写真などの撮影は、大阪大学健康体育部講師坂東隆男先生の御協力によるものです。